

主論文要旨

題目：自己愛と他者愛の関係—トマス・アクィナスにおける「愛の問題」の一側面—

申請者：松村良祐

序章

本研究は、ピエール・ルスローが『中世における愛の問題の歴史』(1907)の中で提起した「愛の問題」を取り扱う諸研究の系譜上に位置付けられる。ルスローが提起した愛の問題とは、「利己的でないような愛は可能であるのか。もしもそれが可能であるとしたら、その他者に対する純粋な愛 (*pur amour*) と、自然本性的な傾向全ての基礎であるところの自己に対する愛は、どのような関係にあるのか」というものであるが、中世には「脱我的な愛」と「自然本性的ないしギリシア的な愛」という上記の問題に対する解答となる二つの愛の存在が主張されたと主張し、トマスに後者の愛を割り当てるルスローの研究は、ジルソンやガイガーによる一定の見直しがあったものの、今日に至るまでなお影響力を保持している。そこで、本研究は、こうしたルスロー以降の研究の陰に隠れ、近年に至るまで見過ごされてきたトマスの語る愛における脱我的な要素に注目し、従来の諸研究の間隙を埋めると共に、「脱我的な愛」と「自然本性的ないしギリシア的な愛」という二つの愛の性格をトマスの内に統合的に位置付け、愛の問題に対するトマスの解答を探ることを課題とした。

第1部 愛の理論の基本的構造

まず、第1部ではトマスにおける自己愛と他者愛の関係を検討するに当たっての準備的考察として、『神学大全』第1-2部に展開される「情念論 (qq.22-48)」を基本テキストとした上で、その他関連するテキストを取り上げ、人間の内に愛という情念が生じる際のメカニズムや、欲求対象の働きかけによって欲求の内に生じた変化としての愛の内実を解明することを目指した。

第1章 魂の被る受動としての愛—愛に関する用語的分析—

トマスは、所謂 *De Amore* と言われる情念論の一連のテキスト (qq.26-28) の中で、愛という情念の持つ内実を表すに当たって、*coaptatio* や *complacentia*、*connaturalitas*、*convenientia*、*consonantia*、*proportio*、*aptitudo*、*inclinatio* といった実に多くの語を用いている。こうした用語法はトマスの愛に関心を寄せる研究者らからも「奇妙な揺らぎ」とときに評せられ、トマスの語る愛に対する確定的な理解を拒む障害として受け止められることがある。しかし、グダニエクがこれらの語の多くに現れる *con-* (*co-*、*com-*) という接頭辞に注目して述べるように、これらの用語は欲求と欲求対象の間の親和的な結び付きを示唆するという共通点を持った上で、それが用いられる文脈や強調点の相違に応じて或る程度の使い分けがなされ、そこにこれらの語を通じて愛という情念の持つ多様な表情を浮かび上がらせようと試みるトマスの思索の一端を見取ることが可能である。とりわけ、トマスが

用いる「好感・喜び (complacentia)」という語は、欲求対象の働きかけを被った欲求の心的状態に焦点を置き、欲求対象へと喜びをもって向かおうとする欲求の姿を浮かび上がらせる。本章では、『神学大全』と『命題集注解』において愛を巡って用いられる用語を対比し、欲求対象の働きかけを起源としつつも、そこへと自発的に向かっていく動的なものとして愛を理解する点に『神学大全』におけるトマスの愛理解の特質があることを明らかにした。

第2章 愛が語られる射程—自然本性的な愛と感覚的な愛—

トマスは、個々のものの自然本性に基礎づけられる「自然本性的な愛」を巡って、「それは愛ということが出来る (potest dici amor naturalis)」と述べている。こうした表現は、感覚的な愛や知性的な愛には見られない自然本性的な愛に特有のものであり、本章ではこうした自然本性的な愛に対して用いられる上述の表現を手掛かりとして、トマスにおいて愛が愛として語られる本来的な文脈を確定させることを目指した。自然本性的な愛と感覚的な愛や知性的な愛において、欲求対象の働きかけを受容するプロセスに相違が見られることは、既にラミレスが指摘していることである。しかし、本章は「認識能力の有無」という点をもとに両者の相違に更に考察を加え、前者の愛における欲求対象に対する秩序付けが自然の設立者である神という外的なものの認識をもとにしているに対し、後者の愛は自らの認識能力をもとに欲求対象の働きかけを受容し、自己を「自己自身で (ex seipsis)」欲求対象へと秩序付けるという構造を持つことを明らかにした。トマスにおいて、愛とは欲求対象という作用者の働きかけを前提としつつも、受動者の内に自己の認識を通じて自己を欲求対象へと秩序付ける受容のプロセスを必要とするものであり、作用者とその働きを被る受動者が協動的に働くことで作り出されるものとして考えられている。

第3章 傾きの自由と普遍的なものへの志向—感覚的な愛と知性的・理性的な愛—

感覚的な愛と人間が固有に持つものとしての知性的・理性的な愛の相違は多岐に亘り、トマスは多様な仕方でその説明を行っている。『真理論』(q.22, a.4)と『神学大全』(1, q.80, a.2)は、これら二つの愛が成立する基盤となる感覚的欲求と理性的欲求の相違を共通の主題とし、そこには二つの欲求を巡るそれぞれに異なる視点からの説明が見出される。すなわち、『神学大全』が欲求能力をそれに働きかける「認識された対象」、より根本的には、認識の働きとの連続性の内に捉え、普遍的な志向を保持しつつも、個別的なものへと向かう知性的欲求の姿を浮かび上がらせるのに対し、『真理論』は認識と欲求の連続性を意識しながらも、欲求それ自身の働きの中に視線を定め、欲求対象からの働きかけを被りながらもそこへと傾くか否かを自ら決定する欲求固有の働きを描き出している。こうした二つのテキストにおいて感覚的欲求と理性的欲求に対して与えられる性格は、対立的な関係にあるものではない。欲求に先行して働く認識をどのようなものとして捉えるかということによって、欲求に与えられる性格も自ずと異なったものとなる。そこで、二つの欲求に対して与えられる性格の相違は、知性と理性という人間の認識能力の持つ働きの相違に基礎づけられ、『真理論』と『神学大全』における説明の相違は、そうした認識の働きに付随して生じる人間の欲求の二側面を映し出すものであったと言える。

第2部 自己愛と他者愛の関係

第2部では、第1部における準備的考察を踏まえた上で、個々の人間同士の関係において自己が他者に対して持つ愛を焦点とし、トマスにおける自己愛と他者愛の関係の解明を目指した。とりわけ、「脱我 (extasis)」という愛の結果をもとに、トマスの語る愛における脱我的な要素を検討する第5章は、愛の問題を取り扱う従来の諸研究において見過ごされてきた間隙を埋める本研究の成果の一つである。

第4章 自己愛から他者愛の派生—欲望の愛と友愛の愛—

トマスは他者愛を語る上で、「欲望の愛 (amor concupiscentiae)」と「友愛の愛 (amor amicitiae)」という二つの愛のかたちを区別している。こうした二つの愛のかたちは、12世紀のパリの神学者らを起源とし、トマスの師アルベルトゥスの著作にも見出されるものであるが、トマスはアリストテレスを援用することで、彼らとは異なる独自の理解を得ようとする。すなわち、トマス以前において、欲望の愛と友愛の愛はそれら「欲望」と「友愛」という語の特質をもとに自己と他者という特定の対象へと向かう、それぞれに切り分けられた二つの愛の働きとして考えられていた。しかし、トマスは「愛することは或るもののために善を望むことである (amare est velle alicui bonum)」というアリストテレスの『弁論術』に見出される愛の定義をもとに、それら二つの愛を一つの働きの内に結び付ける。すなわち、欲望の愛の対象が「或るもの、つまり自己や他者のために望まれるところの善」であるのに対し、友愛の愛の対象は「そのものために善が望まれるところの自己や他者」である。ここで、二つの愛の対象にその本来的な対象を越えた拡張が起きていることは、自己愛の構造を他者愛の構造に重ね、両者の構造に明確な類似性を見出すアリストテレスの友愛論を援用したことに理由があるが、こうした二つの愛についてのトマス独自の理解は、交錯する自己愛と他者愛の関係をより精緻な仕方で検討するための土台を提供している。

第5章 自己を越え出る愛のかたち—愛の諸結果の中の脱我—

クワシニエフスキが、愛の問題を巡る研究史において、トマスにおける「脱我的な愛」の要素が軽視されてきた理由をルスローが脱我に対して与えた「負のイメージ」によると推測したように、トマスの語る愛における脱我的な要素、或いは、それに関する擬ディオニュシオスからの影響は、近年に至るまで見過ごされていた領域である。

ところで、トマスの語る他者愛は「自己愛からの派生」という仕方で説明されることが多い。そして、こうした説明自体は必ずしも間違いではない。愛の結果の一つとして数えられる「合一 (unio)」や「相互内在 (mutua inhaesio)」という事態は、愛する者が愛の対象を自己の延長線上に位置する「もう一人の自分 (alter ipse)」として捉え、そうした認識をもとにお互いを隔てる境界を越えて結び付く両者の親密な関係を確かに映し出している。しかし、トマスにおいて、そうした場面は愛する者の内に起こった「脱我」という事態によって支えられている。つまり、愛する者が自身の欲求を愛の対象に対して向けるためには、自己が自己自身に対して欲求を向ける生来的な状態を離れ、自己自身を越えて愛の対象へと向かうということが必要になる。トマスにおいて、愛する者が「もう一人の自分」として捉

えられた愛の対象と親しく結び付く場面の背後には、脱我という他者志向的な欲求の在り方が存在しているわけである。その意味で、トマスの語る他者愛の内には、愛の対象に対する「もう一人の自分」と、脱我を通して浮かび上がる「他者」という二つの視線が存在し、トマスの他者愛はそれら自己と他者という反対対立する方向に引かれ合う中で絶妙なバランスをとって構成されていると言える。

第6章 自己愛の優位性と他者愛—自己愛の完全性としての他者愛—

人間が生来的な仕方を持つ自己愛の優位性がときに排他的な原理として機能し、他者との対立や衝突といった事態を作り出すことは、トマス自身も認めていることである。そこで、トマスの自己愛と他者愛の関係を問う上で興味深いことの一つは、トマスが自己愛と他者愛の対立と一致を考える上で、その原因を「自己認識」の働きに求めていることである。つまり、自己と他者の間に対立が生じるのは、自身の主要的なものを誤って認識してしまうことによる。人間は主要的なものとして「理性的本性 (*natura rationalis*)」を持つ一方で、副次的なものとして「感覚的・物的本性 (*natura sensitiva et corporalis*)」を持つが、本来は副次的なものはずの感覚的本性を自己の主要的なものとして取り違えてしまうことで、他者と共有不可能な「僅かな善 (*parva bona*)」、つまり可感的な善を欲求し、その結果、自己と他者の間には対立が生じてしまう。しかし、「理性的本性」を自己の主要的なものとして正しく認識するのであれば、そこに対立は生じない。むしろ、理性的な自己愛者は、他者愛の働きを自身の希求する「精神の善 (*bonum mentis*)」として捉え、自ら進んで他者愛の働きを遂行する。トマスにおいて、他者愛は自己愛の目指す完全性として位置付けられている。

終章

トマスにおける自己愛と他者愛の関係を問う本研究の成果は、以下の二点に総括することができる。

I. トマスにおいて、他者愛は自己愛の完全性として捉えられ、他者愛は自己愛の運動の内に収められている。本研究は、こうした他者愛の位置付けを考える上で、「脱我 (*extasis*)」という視点がそこでの他者愛における他者志向的な性格を確保する上で重要な役割を果たしていることを明らかにした。自己に何らの善を意図することなく、他者を愛するというような所謂「利他的な愛」なるものは、トマスの内には存在しない。むしろ、人間が他者を愛するとき、人間は他者愛を通じて自己の意志が完成し、何らかの仕方ですべて善くなると判断することで、他者愛を遂行する。しかしながら、このことは、トマスにおける他者愛が自己愛の内に解消されるものであることを意味しない。愛する者の内に脱我という事態が起こっていることは、愛する者の他者へと向ける欲求が他者へと全体的な仕方ですべて秩序付けられていることを明らかにする。その意味で、本研究は、トマスにおける自己愛の優位性と他者愛の両立を考えるに当たっての「脱我」という事態の重要性を明らかにするものであったと言える。

II. ルスローの研究以来、トマスの語る愛を巡っては、ジルソンやガイガーによる一定の

見直しがあったものの、「自然本性的ないしギリシア的な愛」の要素が強調され、トマスと「脱我的な愛」との関わりは、近年に至るまで見過ごされてきた領域である。確かに、本研究を通じて見てきたように、他者愛を自己愛の完全性として、人間の自然本性的な傾向性の延長線上に捉える視点がトマスの内にあることは事実である。しかし、そうした他者愛理解の一方で、トマスの語る他者愛の内には、他者を自己とは異なる存在として捉えた上で、自己が自己を越えて「他者」へと向かうこととして他者愛を捉える「脱我的な愛」の要素が存在し、それが他者愛における他者志向的な性格を確保する上で大きな役割を果たしている。かつて、ジルソンがクレルヴォーのベルナルドゥスをもとにルスローを批判して述べていたのと同様に、トマスの語る愛の内にも、「自然本性的ないしギリシア的な愛」と「脱我的な愛」という二つの愛のかたちは分ち難く存在していたわけである。そして、このような視点から振り返ってみるのであれば、本研究は、トマスの語る愛に対して向けられるルスロー以降の研究の偏りを修正し、「自然本性的ないしギリシア的な愛」と「脱我的な愛」という愛の二つの性格をトマスの内に統合的に位置付ける上で、大きな成果を持つものであったと言える。